Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-15

青年期における教育保障と移行支援（ラウンドテーブル）

渡部，昭男 ； 河南，勝 ； 岡山，英次 ； 安藤，未帆 ； 荒川，千明 ； 近藤，龍彰 ； 坂本，沙織 ； 早川，一穂 ； 岡本，浩太 ； 森本，彩

(Citation)
第19回日本特別ニーズ教育学会札幌大会発表要旨集:104-105

(Issue Date)
2013

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001901

ラウンドテーブル 3

青年期における教育保障と移行支援

企画者・司会　渡部　昭男（神戸大学）
話題提供者　○河南　勝（エコール KOBE 学園長）／○岡山英次（チャレンジキャンパスさっぽろ施設長）／○安藤未帆（神戸大学大学院生）、荒川千明（同・元大学院生）、近藤龍彰（同・大学院生）、坂本沙織（同）、早川一穂（同）、岡本浩太（同）、森本彩（同・学生）
Key Words：エコール KOBE，チャレンジキャンパスさっぽろ，青年期教育，移行支援

渡部は『障がい青年の自分づくり―青年期教育と二重の移行支援―』（日本標準、2009）において、青年期教育および「子どもから大人へ」「学校から社会へ」という二重の移行支援に係る実践と仕組みを創る必要性を提起した。今回は、ともに 2011 年度にスタートした、「エコール KOBE」と「チャレンジキャンパスさっぽろ」から話題提供をいただく。また、エコール KOBE と共同研究を進めている神戸大学グループからも報告を得て、参加者とともに論議を深めたい。

報告①：福祉事業型「専攻科」エコール KOBE の挑戦（河南）

1）はじめに

エコール KOBE を開設して 3 年目を迎えた。現在の学生数は 1 年生 16 名、2 年生 16 名の計 32 名である（東は大阪や川西市から、西は加古川市から、北は三田市とかなり広範囲）。

療育手帳所持の状況～A：4 名、B1：14 名、B2：14 名（約 2/3 が発達障害・自閉症）。職員～10 名（半数が特別支援学校の経験者）。教室～4 教室と応接室（学生自治会室等兼用）、コンピューター室、多目的教室、職員室。調理実習は近くの地域人材支援センターを活用、スポーツ等は公園のグランドを使用。豊富で便利な社会資源を活用した活動、大学との交流や外部講師の協力を得た講義なども取り入れている。

2）エコール KOBE の挑戦

エコール KOBE の目標は 3 つ。①主体的に学ぶ：学生の学びたいことややってみたいことを大切にし、自分たちで話し合い、考え、運営できるような学びの場を目指している。自分の興味・関心のあるテーマで年間通じて調べまとめる研究ゼミ、「何を作りたいのか」から話し合い取り組む調理実習、就労と余暇の選択講義などにまさに主体性を重んじた実践に取り組んでいる。②ゆたかな体験：生活体験、社会体験、スポーツや文化の体験を多く取り入れ、本物の豊かな体験を通して成長をうながす取り組みをしている。特に、「えこーる新喜劇」、大学とのキャンパス交流、キャンプでのチャレンジ「ツリーイング」など本物の体験にふれることで達成感を得ている。③仲間とともに：青年期を生きる彼らは、仲間と一緒に活動することを通じて楽しさが倍増する。時には意見の違いや自分の思いと違う場面、トラブルや気持ちのすれちがいもある。そこから学ぶ人間関係はその後の人生の財産になり、彼らの内面の成長につながる。学生自治会の活動や部活動も「専攻科」ならではの取り組みである。

3）はじめての卒業生

一期生の卒業旅行はグアム旅行（2 泊 3 日）。パスポートの申請、関空の下見、ドルへの換金、現地での活動内容を決め自分のしおりづくりなど準備を重ね、当日はドキドキの出発。入国審査も何とか終えて思いっきり旅行を楽しんだ。

進路選択は、「自分の進路は自分で選択し決める」という原則を大事にして取り組み、結果、就労移行や就労継続 B 型が多くなった。

4）「エコール KOBE の挑戦」を出版

2 年間の学びを通じて彼らがどのように内面的に成長し、集団として生き生きと育ち合ってきたのかをリアルに表現している。また、高校時代とはちがう「専攻科」ならではの実践とエコール KOBE の考える「教育」の真髄を表現したつもりだ。この本が全国に広がりつつある「専攻科」づくりの運動の力になれば幸いである。

＊『福祉事業型「専攻科」エコール KOBE の挑戦』（クリエイツかもがわ　本体 2000 円＋税）。

【ホームページ http://eko-ru.jp/】

報告②：チャレンジキャンパスさっぽろの挑戦（岡山）

1）高等部希望者全員進学運動

北海道でも90年代に高等部増設運動の結果、全ての養護学校に高等部が設置（98年）され、どんなに障害が重くとも高等部に進学できるようになった。しかし、専攻科設置の課題は壁があり、教育年限の延長を求める声があるにもかかわらず、打開の道を見い出せないでいた。

2）「学びの作業所」設立の経緯

「大学生になりたい」という生徒の親たちが、全障研和歌山の小畑耕作先生の講演で、福祉の制度を利用して教育を行う「学びの作業所」の実践を聴き、これだということで、和歌山に調査にいった。社団法人にじいろ福祉会を立ち上げ、自立訓練（生活訓練）事業所「チャレンジキャンパス　さっぽろ」を設立（2011年度～、詳細は「みんなのねがい」2013年3月号参照）。

3）チャレンジキャンパスさっぽろの概要

利用者（定員20）～1年生男性3名・女性2名、2年生男性1名・女性4名、3年生（特別専攻生）女性1名／ダウン症7名、広汎性2名、その他2名。通所地域（原則自力通所）～札幌市内10区中７区から（10名）、石狩市から（１名）。職員（基準6：1）～サービス管理者1名、常勤支援員3名、外部講師（ボランティア）7名［書道、音楽、芸術、陶芸、理科、社会、プール］。キャンパスの目標「自立した豊な生活」～生活を楽しむ、新しいことにチャレンジする、積極的に社会参加する［「生活する力」「自分らしく生きる力」「社会　参加する力」「権利を生かす力」「自立する力」を高めるための学習の場の提供］。訓練・支援プログラム（月曜～土曜の9:30～15:20）～健康：健康状況のチェックと軽い運動（検温、ラジオ体操、ウォーキング、筋力トレーニング、ストレッチなど）／生活Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ：衣食住に関すること／基礎学力 ・社会参加：職場体験（２年）、外出、サービスの利用など／コミュニケーション：電話の受け答え、雑談力を高める、ニュースの発表など／余暇：余暇の過ごし方（芸術・スポーツなど）／特別プロ：自立生活体験、物作り体験等／総合：研究発表、見学旅行、北星学園大学との交流。費用～実習費、施設利用料、その他必要な費用として実費（月額１万円程度）。毎月個人別支出台帳を作成。残金を積み立て（見学旅行費用）。実際は毎月平均3～4千円。残金は終了時に返金。進路～1期生の進路、4名が就労継続B型に進む。様々な事業所を見学、体験実習をし、自分の進路を決め、契約する。

4）２年半の実践をして

まだまだのびしろのある同年代の仲間が通所できる場があり、一人一人の主体性を育て、自己確立する場として大きな意味がある。企画計画は、必ず仲間の相談と決定・実施を通して自信がつく。失敗から学び、失敗を恐れない。どの利用者も「毎日が楽しい」と言って通所してきている。トラブルも徹底的話し合いや相談という形で解決している。

【ホームページhttp://nijiiro-sapporo.com/】

報告③：青年期の「ゆらぎ」と「変容」—エコールKOBEとの共同研究から—（安藤ほか）

1）研究の背景と目的

2012年秋、共同研究を開始した。「学生がどのように悩み迷いながら自分を成長させるのか」という関心を出発点に、発達検査やインタビューを通じて、職業教育に特化しない「学びの作業所」の意味を明らかにすることを試みた。

2）2012年度インタビュー

対象者は、1期生（2011年入学）のうち4名（男性３名（うち２名はASD）、女性１名）である。質問内容は大きく分けて二つ、「エコールKOBEに来て変わったこと」「えこーる新喜劇でどのように参加しどのように感じたか」についてである。前者～「高校時代は学校に行けなかったが、エコールには通えるようになった」「しんどくなったときに「しんどい」と言えるようになった」と自分の変化を語ってくれた。後者～「我慢する所を頑張った」「セリフや動きが分からなくなった時は恥ずかしかったが、覚えやすいセリフは言えるようになった」と振り返っている。エコールKOBEでの活動を通じて自己の成長を肯定的に見ることができるようになった様子が見られた。

3）今後の予定

現在は、3期生（2013年入学）の4名を対象に共同研究を継続中である。今後、①入学時（2013年7月）、②2年生春（2014年4～5月頃）、③卒業前（2015年3月頃）の3回にわたり、インタビューと発達検査を行う予定である。2012年度は「自分づくり」を中心に行ったが、2013年度は「揺らぎ」に着目して進めている。